

## カッパドキアにおけるギョレメ野外博物館についての一考察

村越 信子

### A Study of “Göreme Açık Hava Müzesi” in Cappadocia

Nobuko MURAKOSHI

#### 1. はじめに

現在のトルコ共和国は、1923年10月、マルマラ海を挟んでアナトリア半島と一部バルカン半島にまたがった国土として誕生した。アジアとヨーロッパが交錯する場所であるアナトリア半島は、1万年を超す歴史が、謎を秘めたまま眠っているのである。歴史とそこに住む民族との関わりについては、我が国とは大分趣きが異なるようだ。

日本の場合、現在の日本の国土と日本国(民族)の歴史とは、だいたい一致する。だが、トルコはそうではない。現在の国土には、ほぼ「トルコ人」が住んでいるにしても、11世紀頃までは、彼等とはまったく異なる人々が住みついていた。これらの人々は、あとからやって来たトルコ族に同化されていったのである。

現在の国土の中に蔵されている(遺跡も含め)歴史の中には、トルコ族ないしトルコ人とは無縁のことが多い。ここで述べる「トルコの歴史」は、現在の国土の中に潜んでいる先住諸民族の歴史で、大変ややこしいものである。

アナトリア半島の中央部に位置するカッパドキア地方は、見る者を驚かさずにはおかない奇観の地と、キリスト教徒たちの洞窟の世界が繰り広げられている。カッパドキアは、凝灰岩の大地である。その地域の谷の一つであるギョレメの谷に、摩訶不思議な奇岩の景観が随所に見られるのである。高見に立って見渡したとき、宇宙の彼方の何処かの惑星の地形かと思ふばかりである。

終末を予感したのか、1～4世紀頃この荒野に祈りの場所を求めた人々がいた。彼等は先住民の残した洞窟を削り広げたり、または新たに凝灰岩を削り、そこに洞窟修道院や教会を造った。その壁面には、びっしりと信仰心に満ちたフレスコ画を描き、数千人の共同生活が可能な20層にも及ぶ地下都市をも建設した。

10世紀のビザンチン時代初期には、400以上の教会や修道院があったという。現在、約30の教会や修道院が残るギョレメの谷を“ギョレメ野外博物館”として、国の保護下におき、今も調査・研究や修復を続けながら一般に公開している。

洞窟修道院や地下都市の機能的な生活空間の構造、具体的な生活の様相に触れながら、ギョレメ野外博物館を中心に考察を進めたい。

## 2. ギョレメ野外博物館

ギョレメ野外博物館があるカッパドキア地方は、トルコ共和国の首都アンカラから南東へ約250キロメートル、その中心ネヴェシェヒルから西へ10キロメートルほどでギョレメの谷である。交通の便はいたって良くない。しかしながら、世界遺産に登録されたこともあって、世界中で紹介される機会が多くなりカッパドキア地方を訪れる観光客も急増している。

ネヴェシェヒル、アヴァレス、ウルギュップの町からなるトライアングル内に、摩訶不思議な奇岩からなる洞窟修道院、野外博物館や地下都市が点在している。

その一角にギョレメ村があり、そこから山側へ1キロメートルほどで、目的のギョレメ野外博物館に着く。見学できるのは大小15のキリセ（洞窟修道院、教会）などである。

土産物店が並ぶ道路から200メートルほど進み、ギョレメ野外博物館の看板を右手に入ると入場ゲートがある。〔写真1・2〕

開館時間…… 8:00～17:00（季節によって多少の変更あり）

入場料金……500万トルコリラ（2001.9 現在 約500円）



（JTB・トルコより転写）



写真1



写真2

### 1) クズラル修道院

野外博物館のゲートを入ると、すぐ横にある大きな岩の塊をクズラル修道院（女子修道院）と呼んでいる。四つの階に分けられた内部には、教会・食堂・食料倉庫などがあり、修道院と

しての総合施設である。食堂には、岩を削って造った食卓が目止る。この大きな岩山の中には、四つの教会の跡が残っている。食堂の横の三つの後陣のある教会にはキリストの誕生に関わるシーンや聖グレゴリウスの生涯とその殉死の場面が描かれている。

二番目の教会は、修道院の名にもなっているクズラル教会であり、十文字の基礎に建て中央のドームは四本の柱で支えられている。立ち姿のキリスト像が描かれている。

## 2) 林檎の教会 (エルマル・キリセ)

クズラル教会から足場の悪い砂地を進むと、一つの岩穴の入口にエルマル・キリセの案内板がある。林檎の教会と呼ばれている。

質素な狭い入口を入ると、中央部にドームを置き、その周辺部にドームを持つ側室、さらに奥に祭室を配している。素朴な穴蔵と思いきや、目を奪うばかりの色彩である。壁や柱そしてドームのすべての面に、キリストをはじめ予言者、天使など、聖書の物語の場面が描かれている。それらは、茶褐色のベンガラ色を基調とした色彩で、たいへん良く保存されていた。

## 3) 聖バルバラ教会

さらに坂道を登ると、次は規模は小さいが、エルマル教会と同じ岩山に、背中合わせに掘られている聖バルバラ教会である。

入口を入ると左手の壁面に、この教会名に由来する聖女バルバラが描かれている。入口の面には、カッパドキアの高名な二人の聖人ジョージとテオドルが、白馬にまたがり龍(大蛇)を退治している場面が描かれている。また、ベンガラ色の単色で描かれた、幾何学模様十字架、鳥、木などをモチーフとしたものが描かれている。これらは、岩を削ってこの教会を造った人々が、魔除けの意味で描いたものと推測されている。〔写真3〕

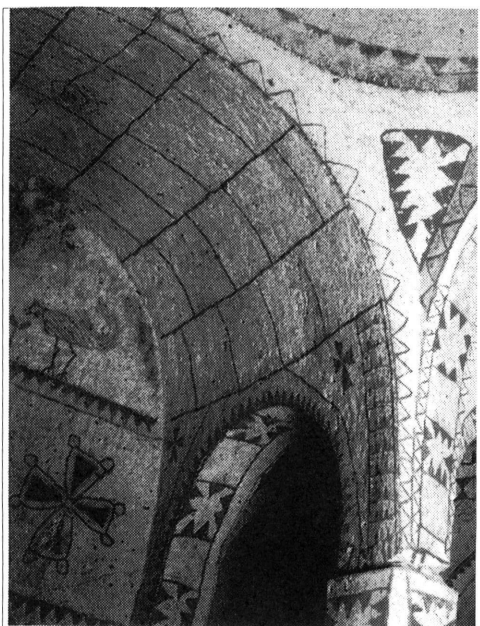


写真3

## 4) 蛇の教会 (ユランル・キリセ)

聖バルバラ教会を出て、しばらく坂道を下ると、ユランル・キリセの入口である。入って左手の壁に、聖バルバラ教会と同じ題材だが、聖ジョージと聖テオドルの二人の聖人が、巨大な蛇を退治しているカラフルなフレスコ画が描かれているので、この名が付けられた。蛇は悪魔の象徴だそうである。その側面には、十字架を手にした皇帝コンスタンチヌスとその母親ヘレンの姿が描かれている。入口左側に描かれている聖オノフィラスは、もとは美しい女性だったが、神にお願いして男性に変えて貰ったという伝説が残っているだけあって、なかなかの美

男子である。

#### 5) 暗闇の教会 (カランルク・キリセ)

強い日差しを浴びながら、緩い坂道を200メートルほど登ると、カランルク・キリセである。この野外博物館にある支柱を用いた教会の中でも、特に立派なもので、総合修道施設とも云えるものである。小さな内庭を囲んで、様々な施設が設けられている。何百年もの間、ほとんど光りが差し込まなかったおかげで、内部のフレスコ画の保存状態がたいへん良好である。六つのドーム、四本の支柱、入口にはアーチのある正方形の外廊と、埋葬用の空間が設けられている。中央本堂の前にある控えの間には、“キリスト昇天”と“使徒たちの祝福”のフレスコ画が見事である。また、丸天井にはキリストの一生を表わす絵が色鮮やかに残されている。〔写真4〕

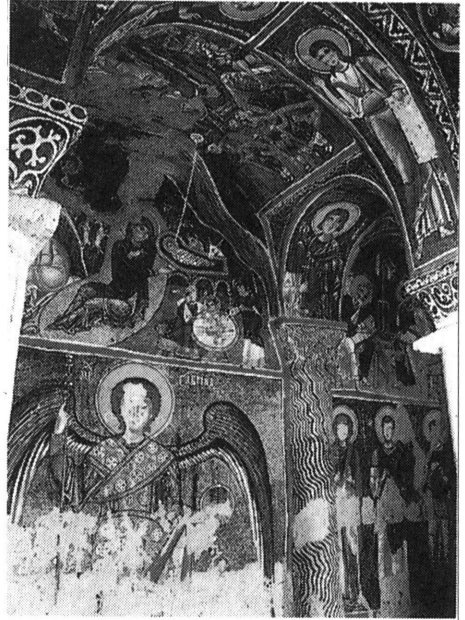


写真4

#### 6) サンドルの教会 (チャクル・キリセ)

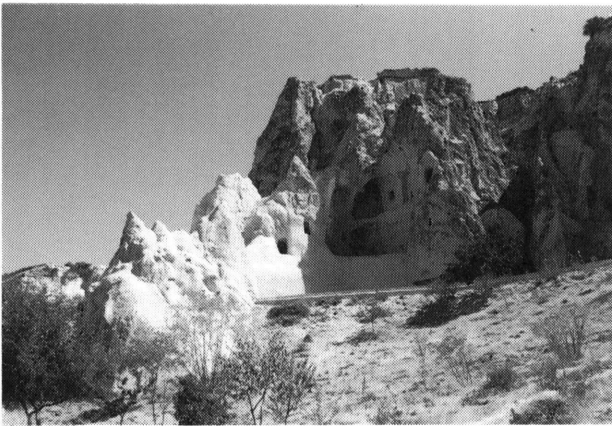


写真5

カランルク・キリセを廻り込んだ裏側の岩山で、この博物館の中で最も高いところにチャクル・キリセがある。金属製のステップで内部に入ると、一部破壊されてはいるが、概して保存状態の良い宗教画が現れる。キリスト昇天の絵の下に、足型が残っていることからこの名で呼ばれている。内部は二本の円柱、アーチ型の天井、四つのドーム

で構成される。中央ドームにある「全能のキリスト」を中心に天使ミカエルとガブリエル、受胎告知など13場面が描かれている。特に、食堂の後ろにある“最後の晩餐”が美しく見事である。〔写真5・教会入口〕

### 7) バックルの教会(トカル・キリセ)

ギョレメ野外博物館の入口を出て、道路を挟んだ向かい側にトカル・キリセがある。入場券は共通となっている。

カッパドキア地方で最も素晴らしい教会で、異なる時代に造られた二つの建物から構成されている。その一つが、10世紀初頭のエスキ(古い)トカルキリセで、物語を絵本のように連続した場面を描いた壁画が目に入る。それらのフレスコ画は、鮮やかなブルーの色彩が多用されていて、実に美しく、一見の価値がある。[写真6]



写真6



写真7

エスキ・トカルキリセは、増築されたイエニ(新)トカルキリセとともに十字形の大きな施設となっている。アーチ、壁などに分散するフレスコ画と建物の調和は素晴らしく、メソポタミアからアストリアに伝わった建築様式が用いられていると云う。950～960年に建設されたこの教会は、ビザンチンにおける黄金期の代表作と云われている。

ギョレメ野外博物館から北西へ約20キロのアヴェノスの近くに、もう一つセルヴェ野外博物館がある。時間がなく見学することはできなかったが、ここにも教会や住居跡が残されているが、幾分保存状態が悪いそうである。[写真7・博物館全景]

### 3. 地下都市の生活について

カッパドキア地方は、荒涼とした丘陵の中にニョキニョキと巨大なキノコ状の奇岩が点在する、摩訶不思議な世界である。とても人が住んでいたとは思えない地形だが、比較的柔らかな凝灰岩を削り、洞窟住居、さらに地下住居として生活が営まれていた。1～4世紀、初期キリスト教徒たちが移り住んだ以前から、土着の人々が生活していた痕跡(土器片など)が残されている。

このカッパドキアの景観は、数百万年前の火山の噴火が生みの親である。東側にあるエルジYES山(3,917メートル)と百数十キロ離れた西南にそびえるハッサン山(3,268メートル)さ

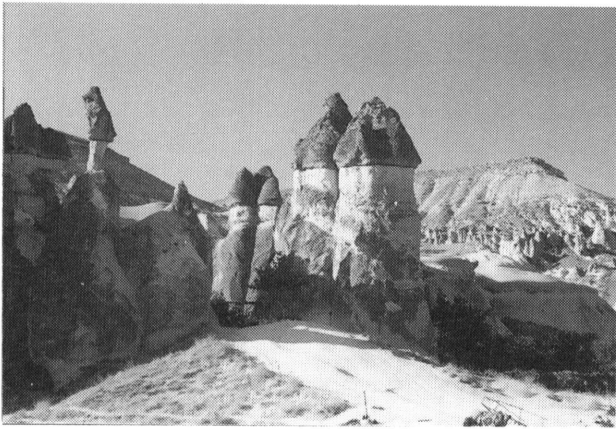


写真 8

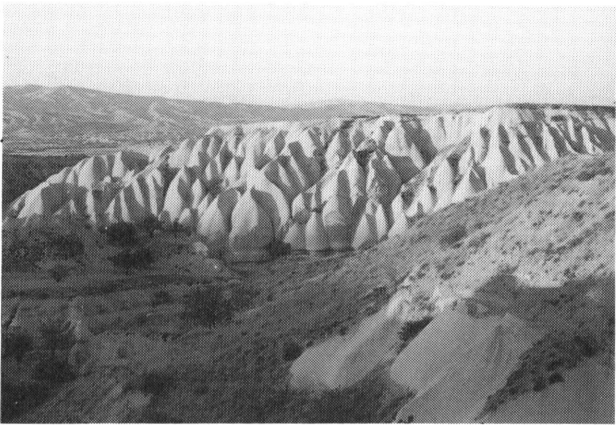


写真 9

らに、その他周辺の火山が繰り返し噴火で、この地域に火山灰、溶岩などが50メートルほど積もり、広い範囲にわたって玄武岩や凝灰岩などの岩石地帯を形成した。そして、黒海からの湿った空気がタウルス山脈にさえぎられ、この地方にもたらず風雪と雨水の浸食、寒暖差の激しさが岩を奇怪な形に削り、カッパドキアの奇観を造り上げたのである。〔写真8・9〕

紀元前5世紀末から紀元前4世紀初頭、新天地を求めてペルシャに涉ったアテナイの青年クセノボンの自叙伝「アナバシス」に次のように記されている。『ここでは家が地下に造られており、井戸の口のような出入口があり内部は非常に広い。家畜用の入口はトンネルになっており、人間は梯子で出入りするようになって

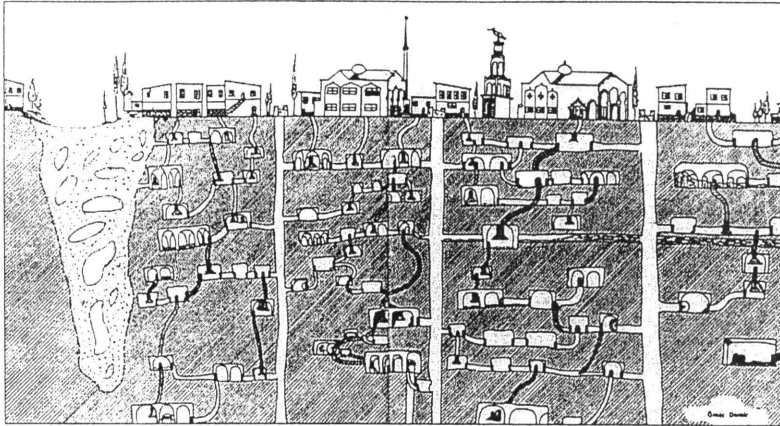
いる。』<sup>1)</sup>と、クセノボンが述べているのは、東アナトリアにあった地下都市のことである。カッパドキアの地下都市とは、800年ほどの時間差があるが、しっかりと記録が残されていないカッパドキア地域の地下都市を考察するのには大変参考になる重要な資料と云える。

### 1) カイマクル地下都市

ギョレメの谷から車で40分はど南へ走ると、カイマクル地下都市がある。カッパドキア地方に300以上残されている地下都市の中で、見学できるように整備されているのは、こことデルンクユ、オズコナックだけである。

カイマクル地下都市は、村の東の頂の下にあって1964年から公開されていたが、近年とみに脚光を浴び訪れる観光客が急増しているという。修道士の生活の場としての地下都市の目的と、6～10世紀にかけて、この地を襲ったペルシャ、アラブの襲撃に際して、避難用のシェルターの要素を含めて、建設されたと考えられている。その広さは、合計で2.5平方キロメートルを有し、内部には100の部屋をもち3,000人が住めたほどの巨大な集合住宅である。未だに全貌が





地下都市の構造(集英社・カッパドキアより転写)

解明されていない。  
この地下の通路は、  
水平に広がってい  
くのみならず、垂  
直方向へも掘り進  
められている。お  
よそ地下7～8階  
の規模であろうと  
推定されているが、  
現在、地下4階ま  
で見学できるよう

に整備されている。

小さな穴から入って狭い通路を頭を下げて、急な斜面に足をとられぬようにそろりそろりと奥へ進む。1階には厩があり、直ぐ右の通路を通して地下2階の小さな教会に入る。壁面にはフレスコ画が皆無なので、年代の想定を困難にしている。この階には、墓もおかれており、修道士たちが使用していた階であったと云われる。地下都市の最も重要な施設が3階に集中している。食料倉庫・ワイン醸造所・台所などである。ところどころに細い縦穴があるが、覗いて見ると換気孔であることがわかる。はるか奥深くには地底の井戸に通じているらしい。食料倉庫の大きさ、集会所の広さ、多くの居間などから如何に沢山の人がこの都市で生活していたか想像できる。

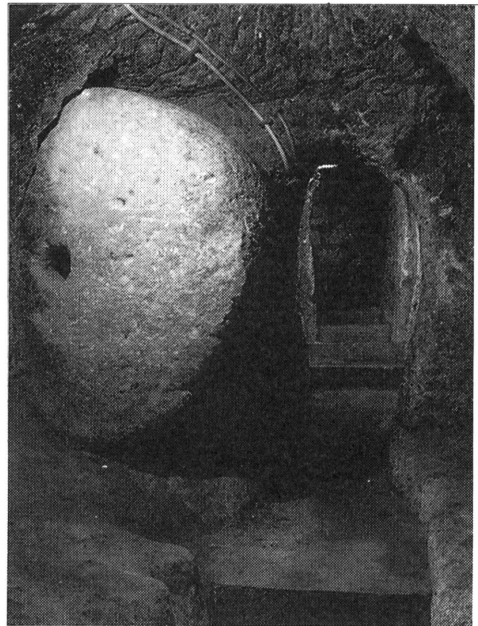


写真10

3階の入口の横には、大きな丸形の石が壁際にどっかと鎮座している。〔写真10〕この大きな石の塊は、敵の侵入を防ぐ非常ドアで、転がして動かすために丸く造られている。直径1.3メートル、厚さ50センチメートルほどで重量は約250キログラムあると云う。また、緊急時の連絡用の通信管(穴)が穿たれ、通路の壁の随所にはオイルランプ用の窪みが削られている。何よりも大切なのは換気孔である。最深部においても、快適な生活ができるよう、幾筋もの換気孔が設置されているのであろう。洞窟内の気温は、年中ほぼ17℃と安定しており、夏は40℃を超え、冬はマイナス30℃にもなる外の厳しい気候と比べると、寧ろ快適な生活環境であったのではなかろうかと推測できる。〔写真11〕

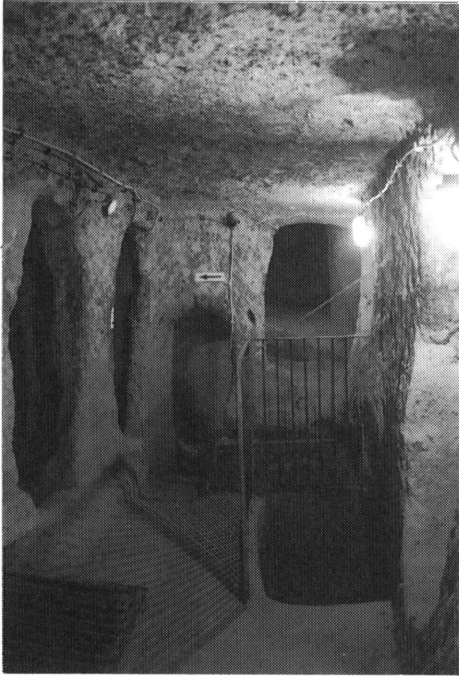


写真11

## 2) デリンクユ地下都市

ここは見学する時間がとれなかったが、追記しておきたい。カッパドキアの中心地・ネヴェシェヒルの南30キロメートルほどに位置している。この地下都市の規模は、18～20層、深さ40メートル程度と想定されているが、現在はこのうちの8階までが整備され公開されている。

地下1階には、家畜用の飼料を保存する窪みが残る厩がある。次にワイン醸造所・丸天井のある集会所などの大きな空間が穿たれてある。5～6階のトンネルのような通路の左右には、沢山の小部屋が点在しており、プライバシーもある程度守られていたようである。地下の7階には三本の柱で支えられたこの地下都市で最も広い空間がある。その他十文字形の教会、井戸、そして狭い通路の奥には墓地までもが完備

していた。真直ぐ地下深くへとつながる換気孔、大きな貯水槽など機能面に関しても良く工夫がなされている。

## 4. 現代に生きる古代住居

最近、カッパドキア地方のムスタファパシヤ村に住む、チュティ家にホームステイした日本女優の体験記がテレビで放映された。11世紀頃のキリスト教徒たちの生活と、この地方の現在の生活と重ね合せて、興味深く鑑賞した。

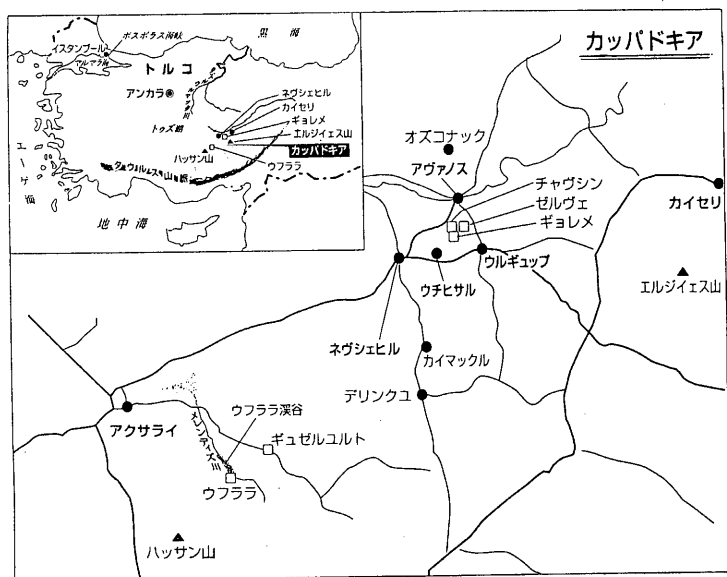
チュティ家は、30人の大家族での生活であり、農業とワイン造りで生計をたてている。現在この辺りの農家は、日干しレンガ造りで、平屋根が多く、壁にはこの地方特有の凝灰岩の切り石が使われている。そして背後の岩山に密着していることが多い。それは、古い洞窟住居と接続されているからである。

このチュティ家も、かつてキリスト教徒たちが住んでいたような洞窟住居が応接間や居間として使われている。この部分が重要文化財の指定を受けたため、国のものとなり、その部分の家賃を払って使っているとのことである。増築、改築などのもつてのほかで、掃除や手入れなど、管理をしっかりしなければならないそうである。この洞窟住居内の年間気温は、約17℃に保たれているようで、ワインの醸造所として最適の環境である。チュティ家の醸造所は、昔のままのブドウ搾り室、次の部屋へ通る孔からブドウ液が出てきて醸造槽へ流れ込むシステムが生かされていた。



かつての修道院も今は鳩小屋に利用され、鳩の糞を肥料として活用している。また一見痩せた土地のようだが、この地方はじやがいもの産地であり、アンズ、スモモ、その他各種の野菜も収穫できる。アンズやスモモなどは瓶詰めにして、またじやがいもなどはそのまま、年間の気温の安定した洞窟が天然の貯蔵庫であり、今も変わらず、生き続けているのである。

昔の石造りの共同パン焼窯が健在であった。ピデというパンの一種は、酵母を入れた生地を各家庭で3時間ねかせて、持ち寄り共同窯で焼くのである。味付けは各家庭でいろいろ工夫されている。燃料は麦わら、エジプト豆の殻、牛の糞を干したものなどが使われている。週に一回ぐらい、村の女性が総出でパンを焼くのが、ある種のレクリエーションなのであろうか。古き遺跡の中の、今なお続く農村の生活をかいま見たのである。



地図(トルコ全図・カッパドキア地域図)

## 5. 結 び

マルマラ海を挟んで、アジア側から日の出を眺め、ヨーロッパの地で日の入りを拝める国という感傷的なイメージとして捉えていたトルコ共和国であったが、カッパドキア地方を中心に見学する機会を得たことにより、この国に対する認識を新たにした。

色々な民族のめまぐるしい交代のなかで、多様な文明を累積したトルコの歴史は、容易に理解することはできない。機会を得て見学することのできたギョレメ野外博物館や地下都市での生活を中心に考察を進めてきたが、ほんの一端のみに終始しただけである。

長い歳月をかけ、火山の噴火や風雪、雨水などの偉大なる自然の力によって、造り上げられた摩訶不思議な造形美。その自然の造り出した、奇怪な岩山を削り、掘り進んで、修道院や巨大な地下都市を造り上げた緻密な技術。その生活環境を維持するための数々の機能的な設備な

どたいへん良くできていて、驚くばかりであった。現代の便利な生活に慣れ親しんだ我々が、この地に迷い込んだら、とてもこのような生活の仕方は考えつかないだろう。

ギョレメ野外博物館で見学した教会内の構造は、中央にドームを置き、周辺部にもドームをもつ側室、さらに奥には祭室まで配されていて、とてもあの質素な入口からは想像もできなかった。町の教会建築を岩山の中に穿ち造り上げたのである。ドームの天井や壁面、柱などにびっしりと描かれた聖書の物語のフレスコ画は、聖書の世界に身を置きたいと願ったキリスト教徒たちの強い信仰が感じられる。このギョレメという地名は、「見てはならないもの」の意で、奇岩、奇石の世界をよく表わしている。

彼等の信仰と生活力が、祈りにふさわしい、また、異教徒からの迫害を逃れる避難場所として、洞窟修道院や地下都市を造り上げたのである。

あえて付け加えるならば、野外博物館の広大な敷地内には、見学途中の休憩場所が見当たらないことである。強い日差しの下では、日陰の下で涼風を求める場所がほしい。現代の生活の中で「バー・エヴィ」と呼ばれる住宅がある。トルコ語で「果樹園の住宅」という意味だそうだが、単に果樹園付き郊外住宅と理解することはできない。この果樹は収穫のためではなく庭に日陰を設けることを目的としていて、食するのは食後のデザート程度である。葡萄の木で葡萄棚を築き、その下で談笑を楽しみ、お茶を飲み交す空間づくりを大切にしている。アナトリア大地の気候、風土を熟知しているトルコ人のすばらしい生活習慣が生きているのである。野外博物館の一角に、こんな葡萄棚があったらと願う。

#### 参考文献

- 1) 赤松順太：トルコ生活紀行。東京、かや書房、1997.
- 2) 松谷浩尚、稔：イスタンブール・トルコで暮らす。東京、中央経済者、1999.
- 3) 山本達也：トルコの民家。東京、丸善、1991.
- 4) 大村幸弘：カッパドキア。東京、集英社、2001.
- 5) 巖谷国土：オリエント夢紀行。東京、河出書房新社、1999.
- 6) Mehmet Cuhader：カッパドキア。トルコ、REVAK社、1999.

#### 引用文献

- 1) クセノポン：アナバシス。東京、岩波書店、1998. p. 180